

## 物

### 年頭希願

三人の兄弟があった。三人はそれぞれ不思議な魔術を習った。魔術を知った三人が集った。そうしてその術を自慢し合った後、腕くらべをすることにした。先ず甲は自慢ながらに獅子の骨格を造った。そうして「おいどうだ」というような顔をした。乙は、では俺はというのでその骨格に肉をつけた。獅子が出来た。丙の番が禿た。彼は更にその獅子に生命をふきこんだ。動かなかつた獅子は動き初めた。そうして吼えはじめた。その本性を發揮して見るまに三人にとびかかって三人を食い殺した。

汽車、汽船、飛行機、毒瓦斯、電車、自動車、大砲、機関銃、……等々……  
而して貨幣。それらがいつたい我等を生かすのか殺すのか。

今や世界は「物」によつて苦しむ。  
「物」が人間を本質的に幸福にしないで、物によつて虐げられ、物によつてたおさされる。

心が物の世界を決定しないで、物が心の世界を左右する。人間の心の不可思議なる能力が造り出した文明という獅子によつて、造つた人間が噛み殺される。人が物を使わないで、物が人を使う。物が人よりも優れた地位にある。

物の動きの中に一つの法則がある。物は如何に動いたか。そこに道義がある。共に産に社会がある。そこに真理がある。

飽くことなき貪欲の心、この心が人間の心の王座を占める間、人間の世界に平和はない。そうして人間とは貪欲それ自体のことだ。厳かなる法廷に人の子の罪を裁く判検事も、俸給の問題になると結束して立つて、険悪なる空気の中に、猛烈なる反対運動に成功する。

飽くことなき貪欲が、物を集めることに興味を持つ。他人が泣こうが苦しもうが、自楽のためには他人の惨状には目をふさいであらゆる手段を用いる。そうしてその物に苦しめられながら地獄の火炎の唯中に没落してゆく。

積尊、大無量寿経に曰く「尊となく卑となく、貧と無く富となく、少長男女共に饑財を憂う。有無同じく然り、憂思まさに等し。屏営として愁苦し、累念積慮し、心のために走使せられ、安き時あることなし。田あれば田を憂い、宅あれば宅を憂う」  
有るも憂い、無きも憂う。

我等の現実の真相の暴露ではないか。  
貪欲の心を無制限に働かして生きてゆく以上、物は永久に「憂」をもたらす獅子である。物が人間のための浄土には変らないのか。

ある耳鼻科の医院では、耳の手術中に大手術らしく見さすために「大きな音をさせよ。」と医師が看護婦に命じた。やがて手術料五十円が請求された。患者には支払うべき金がなかったもので、その娘を売ってその払いをすました。

ある所では二ケ年間も続いた小作尊議が解決された。それにたずさわった人の話である。「欲」より外には如何なる心も持ち合せのない女の地主が、小作の田をとりあげた。それから問題が発生してあらゆる醜状を描きつつ事件がこみ入って、終には刑事問題まで引き起こした。小作の解決条件の一にはこういうのがある。「自分の作っていた田をもとにもどして作らすこと、それと一緒に隣の権が作っている田をとりあげて一反幾畝を自分に作らすこと。」というのである。

もしこれを許せば「権」は更に小作尊議を起す。そうしてその解決条件に「八」が作っている田をこちらにと主張して二年間「八」は更に「熊」の田を………尊議は何時になったらすむのか。欲と欲との大関が集った時、こうした醜状以外の何があるか。

ある女の人が自分の生んだ男の子を、一生懸命になつて、女子一つで育てて行つた。そしてその男の子が二十になり、やがて徴兵検査を受けた。その時になつて、男の子は自分の子で自分の籍に入っていたはずだったので、何時のほどにか男の親の籍へ入っている。女は自分が精を入れて成長させた息子が何時のほどにか男のものになつていたので、驚いて男に交渉すると、金を出せば籍をやるとの非道な言葉である。やむなく幾十円かのお金を出して息子の籍を自分の方に入れた。だが男の無理難題はそれだけではなかった。それからこの男の親は、毎月々々この育てぬ子供から金を搾り取ることを始めた。三十円、十円、五円、悪魔にとりつかれたように、どこまでも男の子の弱さにつけこんでとりつくしはじめた。その金は皆その男の酒代になつた。青年は妻を迎えた。どうしても責められおどかされて金を出さねばならなかつた。その男親が病氣になつた時は、その治療費まで出さされた。五年、十年、そして四十にも近づくようになるまでには、とうとう家も田も山も人手に渡つてしまつて無財産になつた。人間なるが故に、時にはこの非道な父親を殺してやろうかと思つたこともあつた。ある時は脅迫状を種にして、お上の裁きの庭へ訴えて出ようかと思つたことさえあつた。しかし弱い彼はそれすらすることが出来なかつた。とうとう生れた田舎を捨てて、今は市に出た。この街に出ても父からゆすぶられることに変りはなかつた。この苦悩は彼の一生を幽鬱なるものにしたが、彼はやがて信仰の道に入った。そうして今では苦しい中にも一縷の光に生きている。父が来た時、お酒を出すと「お前は何という親孝行人だろうか。」と流石に鬼のような父も涙することがある。「お父様。あなたも仏様の道に入ったらどうですか。」と言うと「何、仏教か、それなら俺に問え。俺は寺の坊主どころじゃない、よく知っているぞ。」と言つて理屈をならべる。全く手の出しようがない。彼は今でも二本も三本も金を送れと手紙がくれば、依然として送金している。養つてくれたことのないこの非人道な酒のみの貪欲な父親に。

深い無明の世界に、飽くことなき貪愛にただれて、子供までジリジリ食いつくしてゆく。これがこのままでよいのであろうか。晃々たる靈性のさめざる限り、この男はそのままに鬼ではあるまいか。

この不景気に街にも田舎にも食えない人たちがあふれている。特に農村の疲弊はその極に達している。ある村では寺の門の新築建立が計画されて二万円の出派なものが建てられた。門徒一軒が米一俵づつ出してくれたら建てられるのだからというのが院主の意見だった。だが、平均米一俵搾るためには二百円も三百円も出す人がなければ集まるものではない。

我等も決して宗教のためにその道場の不必要を叫ぶものではない。しかし二万円の金で建てられた門が何を生むのか。寺の美観という以外には何等の生産的な意義も必要もないものだ。そして税金さえ出されない農民たちが如何なる生活をしているかを知りつくしたら、あるいは又天下に今、何が叫ばれているのか、時代の声か何であるかを知ったならば、この院主は顔を赤くせないではいられないであろう。

二万円の金があつたら、立派な講堂が小学校に与えられる。

大量生産の出来る印刷屋で一冊五銭の書物を造れば、かなり厚いものを刷つてくれる。五銭の本だつたら四十万冊出来る。四十万冊天下に配本したら随分の反響を生むことが出来る。食うに困る人を一日二十銭で養えば、二万円あれば十万人を一日養うことが出来る。

二万円の門を建てる代わりに、なぜ彼が信ずる大法のためにこの資力をそそがないのか。有形の門よりも無形の門を建てないのか。そうしてこの門は如何なる心が建立させたのか。この門が正法の輝きを意味するか。大法の没落の記念塔なのか。

ある寺では住職の継職披露の大法会が営まれた。米一升十三銭、一円だつた藪が二十銭、その田舎の村で二千元の金が集つた。その金は五日の間に使われた。何等意義のないジャズ的な騒動の最中に、こうした事柄を村の青年たちが如何なる眼で見ているのか。村が可愛かつたら、日本というお国のことが少しでも心配だつたら、大法宣布の使命を感じるなら、社会の動きを見るならば、自分たちの足場がわかるならば、どうして「物」の動かし方について徹底した考えを持たないのか。

光明団本部では一月元旦二組の結婚式が仏式で営まれた。本部員やその一族ばかりである。司婚者である私に紋服がない。年賀にまわる市内団員の羽織を一寸拝借。新郎新婦四名の中、着のみのまま、平常のより外に着がえ一枚持たぬものが大部分、結婚だとして銘仙一枚出来るのではない。もちろん紋付羽織を持った者がいようはずがない。

二十円出したらいよいよ羽織が一枚出来る。百円の余裕でもあつたら、せめて一枚づつでも………いいえ米代すら支払えぬ会計で何が出来るよう。

愚痴一つ言うのではなく、皆朗らかな心と顔色、「相済まない！」金持をうらむのでもなく、貧しい中での奉仕を鼻にかけるでもなく、こうして一団となって働いてくれる皆を思つた時、沈黙の涙以外に何があるう。

おい、今のまま、富む日を予想することなく、餓える日には一緒に餓え、笑う日には一緒に笑おう。

物は生きてゆく上に欠くべからざるものだ。しかしながら物にむかつて貪欲である心からは不平と愚痴しか生れない。

正しい念いに住せよ。

大法に道義に願生しようとする心は、限りなき貪愛を越えて、使命の自覚と、金剛不壊の信念との中に、不滅の光悦と微笑とを恵むであろう。